

令和7年度事業報告

自 令和 7年 4月 1日
至 令和 8年 3月31日

公益財団法人ハイレイフ研究所

1. 令和7年度事業計画・基本方針

＜方針1＞ 財団理念と事業目的に基づき、中期事業計画(2023-2027)に則った調査・研究事業を推進する

(財団理念)「都市生活者のよりよい生活の実現への貢献」

(事業目的)「持続可能な都市居住の実現に向けた知見の獲得と、社会との共有」

- ・日本の未来に視座を据え、持続可能なまちに、多様な人々が共に幸せな暮らしを営むような元気な日本の姿を描きたい。
- ・すべての調査・研究事業のベース(下敷き)を「都市×知」とし、『まち』『ひと』『くらし』の3カテゴリーの掛け合わせを考え、調査・研究を行っていく。

＜方針2＞ 公益法人研究所の使命として、将来への変化の予兆を発信し続ける意味でも「リアル×バーチャル」を意識することは必要不可欠

- ・財団理念と事業目的に基づいた中期事業計画を全うしていくうえでは、今後、仮想空間上での「くらし」も大いに認識しておく必要があり、「デジタル・バーチャル研究」に取り組んでいる。
- ・その認識を調査・研究事業全体に広げる意味でも、「都市×知」をベースとし、「リアル×バーチャル」の組み合わせが、この先どのように『まち』『ひと』『くらし』に作用していくかを考えていく。

＜方針3＞ 公益事業1と公益事業2のを完全に連動させ発信性を高める

- ・公益事業1(調査・研究)および公益事業2(啓発・活動)を、本来の事業(その目的・意義)にカテゴライズし、事業を整理する。
- ・その上で、ポイントを絞った情報発信、広報活動を活発化させ、公益財団法人ハイレイフ研究所の更なる認知向上を図っていく。

2. <公益目的事業の実施状況> 令和7年度事業について

(1) 事業一覧

研究主管名

<公益事業1> 調査・研究事業

- | | | |
|--------|--|---------|
| ■調査: | 都市生活者意識調査 | (継続) 杉本 |
| ■研究1: | 「共創」研究2 -ガストロノミー・アーバニズム 美食都市- | (継続) 榎本 |
| ■研究2: | 「リアル×バーチャル」研究
-V~OKINAWAの研究継続と横展開へのチャレンジ- | (継続) 渡邊 |
| ■研究3: | 「Worker's PRIDE」研究 | (継続) 玉井 |
| ■研究4: | 「水辺都市の研究」 | (新規) 榎本 |
| ■特別研究: | 「ノーマライゼーション〜誰もが活躍できる社会になるために」 | (継続) 吉岡 |

<公益事業2> 啓発・活動事業

◎ホームページ企画

- | | | |
|-----|---|---------|
| □A: | 「速報！わくわくお買い物レポート」 | (継続) 玉井 |
| □B: | 「都市の鍼治療」データベース | (継続) 藤原 |
| □C: | 「都市生活者意識調査 2010-2024 から得られる示唆」 | (新規) 杉本 |
| □D: | 「共創」研究2 -ガストロノミー・アーバニズム 美食都市- ヒアリングレポート | (新規) 榎本 |
| □E: | 「Worker's PRIDE」 | (継続) 玉井 |
| □F: | 「テリトリーオ研究3」 | (継続) 杉本 |
| □G: | 「水辺都市の研究」 | (新規) 榎本 |
| □H: | 「銀座の時層 2030」出版化 | (新規) 藤原 |

◎セミナーの開催

- | | |
|-----|---|
| □A: | 第43回ハイライフセミナー
(R.6年度「共創研究」(音楽都市)に関する研究成果の報告) |
| □B: | 第44回ハイライフセミナー
(R.7年度「共創研究」(ガストロノミー・アーバニズム)に関する研究成果の報告) |
| □C: | 第45回ハイライフセミナー
(「リアル×バーチャル研究」(公1・研究2)に関する研究成果の報告) |

◎報告書の作成&配布

- 令和7年度は
- ・「都市生活者意識調査 2024」の分析編のみ
(同データ編は、ホームページへの掲載だけ)
 - ・「自己創造の時代」

(受託研究) ・令和7年度「受託研究」はなし。

(2) 事業内容：(公益事業1)「調査・研究」

公1 調査 都市生活者意識調査

2010 年度～研究継続

■研究概要

本調査は、2010 年から 2024 年までの 15 年間にわたり、首都圏 30km 圏内を対象に、18～79 歳の都市生活者を東京都の人口分布を参考に割り付けて毎年実施してきた意識調査である。長期継続調査として都市生活者の意識変化を把握してきた。

本年度は調査実施を隔年とする新方針への移行初年度として位置づけ、実査は行わず、調査の内容そのものを抜本的に見直し、再定義するための一年とした。活動の中心は、これまでの調査結果の総括と分析視点の再検討、および今後の調査が果たすべき役割の明確化である。

その結果、本調査を当財団の基幹調査として改めて位置づけ、すでに「一億総中流」ではなくなった現代社会に対応した、都市生活者の生活価値観に基づく調査設計へと転換する方向性を整理した。具体的には、生活価値観の異なる複数の都市生活者層をクラスタとして把握し、それぞれにとっての都市の価値を定義することで、自治体の政策立案に活用可能な調査へと発展させることを新たな方向性とした。将来的には、一都三県の自治体に向けた政策提言へと接続することを目指している。

あわせて、これまでに蓄積してきた調査資産の活用にも取り組んだ。過去 15 年分の調査ローデータについて、社会調査としての性格を踏まえ、主な利用者を研究者と想定し、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センター (SSJDA) に寄託し、順次公開を進めている。

さらに、SSJDA での公開に先行し、当財団内において過去調査ローデータを再集計可能な環境を構築し、同一設問を複数年にまたがって一括集計できる基盤を整備した。

■アウトプット

- ・調査企画書
- ・過去 15 年分の都市生活者意識調査ローデータの SSJDA への寄託および順次公開
- ・当財団内における過去調査ローデータ再集計環境の構築

■アウトカム

「ポスト総中流社会」に即した調査設計への転換により、都市生活者を生活価値観クラスタとして細分化して捉える視点の整理。来期の調査により一都三県の自治体における都市活性化政策・施策立案に活用可能な、実態に即した解像度の高いエビデンス形成に向けた基盤の提示を見込む。

共創研究2ーガストロノミー・アーバニズムー美食都市

2025 年度にて研究終了

■研究の概要

本研究は「ガストロノミー・アーバニズム (Gastronomy Urbanism)」という概念のもと、食文化を起点として都市のあり方を再考し、人々の暮らしに新たな豊かさをもたらす可能性を探るものである。

近年、都市では単身世帯の増加や共食機会の減少、地域コミュニティの弱体化といった関係性の希薄化が進行している。一方で食は、世代や立場を越えた偶発的な出会いや共在を生み出す数少ない媒介であり、都市の社会的分断を緩和し得る要素である。本研究は、食文化が都市の空間、社会、経済、文化にどのように関与し得るのかを明らかにすることを目的としている。

食を通じて都市や地域の再編集に取り組む実践者へのインタビューを通じ、その活動内容や思想、関係性の構築プロセスを分析した。対象としたのは、郷土料理「しもつかれ」を市民に開かれた文化資源として再定義し、地域活動を展開する青柳徹氏、京都の和食文化を支える事業者間連携による社会実験を行う桜井肖典氏、食と都市・社会の関係を文化的・思想的観点から捉える中東篤志氏である。これらの事例を通じ、食文化を媒介とした実践は、多主体の関係性を再編し、地域固有の文化資源を再評価・更新することで、都市における新たな関係性の構築を促すのではないかという仮説を検討した。

本研究の独自性は、食を「消費」や「観光」の対象としてではなく、都市の諸領域を横断的に接続する媒介として捉え、その実践構造を明らかにしようとする点にある。また、食文化を市民にひらかれた創作対象として位置づけ、文化の更新とコミュニティ形成が同時に進行する可能性を示した点にも特徴がある。ガストロノミー・アーバニズムは、食から都市全体を生態系として捉え直す視点を提供する実践的概念であることが、本研究を通じて示唆された。

■アウトプット

ホームページ企画「都市×知 ガストロノミー・アーバニズム」インタビューレポートを配信

- ・第1回 青柳徹氏インタビュー・レポート「しもつかれブランド会議」
- ・第2回 桜井肖典氏インタビュー・レポート「京都の和食文化」
- ・第3回 中東篤志氏インタビュー・レポート「日本食の精神」

ハイライフセミナー「都市×知 ガストロノミー・アーバニズム」を実施。

- ・第1回：『食』をまちにひらく―青柳徹氏インタビューより
郷土料理「しもつかれ」を市民にひらくことで、食とまちが相互に作用し、コミュニティ形成と文化更新が進行する事例の提示。
- ・第2回：『食文化』の生態系を編集する―桜井肖典氏・中東篤志氏インタビューより
和食文化を支える事業者や道具、人のつながりを生態系として捉える視点の提示。

■アウトカム

食文化の新たな地域活性化視点の提示

今後の都市政策・地域実践への応用可能性の示唆

■その他

本研究は一連の共創研究におけるひとつのテーマで単年度での計画であった。当初の目的は達成できたため本テーマにおける事業は終了とする。

「リアル×バーチャル」研究 「バーチャル沖縄」の研究継続と横展開へのチャレンジ

研究継続～2026 年度迄予定

■研究概要

本研究は、「立体的なデジタル空間には新たな生活スタイルが生まれるのではないか」という仮説のもと、株式会社あしびかんばにーが運営するメタバース「バーチャル沖縄」を題材として、2023 年度より継続して実施している研究である。

研究の過程において、リアルとバーチャルを掛け合わせることで、地域が本来持つリアルの魅力をより強く引き出し、ブーストさせることが可能であることが検証された。この知見を通じ、CIVIC PRIDE を活用した地域活性化の手段として、メタバースの活用が非常に有効であるとの認識に至った。これを踏まえ、メタバース活用における成功ポイントを整理し、具体的な事例としてハイライフ研究所ホームページ上で紹介してきた。

さらに次なるフェーズとして、リアルとバーチャルの融合施策の可能性をより実証的に検証することを目的に、PoC（概念実証）の実施に取り組んでいる。あわせて、これらの成果を他地域における地域活性化の取組みに応用することを目指し、兵庫県豊岡市において「演劇」をコアとしたメタバース活用という新たな切り口での横展開（PoC）の実装作業を継続している。デジタル単独にとどまらず、地域でのリアルな活動を結び付けることで創出される新たな価値の検証と実装が、本研究の中心的なテーマである。

本研究は、進化を続けるデジタルテクノロジーを活用して、全国各地で課題となっている地域活性化に向けた実践的な知見を提示することを目的としている。

■アウトプット

- ・メタバース活用における具体的な成功ポイントを整理した資料の公開
都市×知「リアル×バーチャル研究」『バーチャル沖縄』研究報告書

■アウトカム

- ・沖縄におけるリアルとバーチャルを融合した地域活性化施策（PoC）の実施
- ・豊岡市における演劇をコアとしたメタバース活用の実装（継続中）
- ・将来的な他地域への横展開に向けた知見と実践モデルの蓄積

■その他

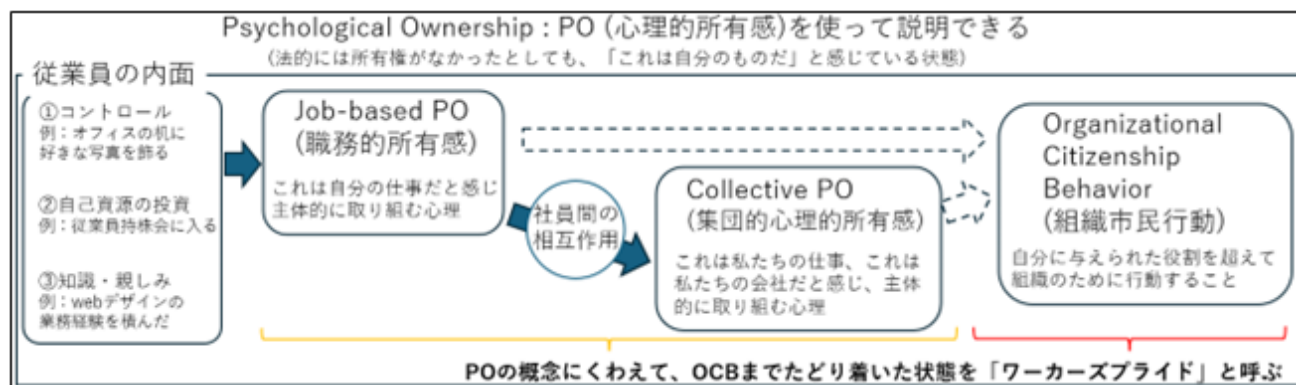
沖縄での PoC および豊岡市での実装においてスケジュールの遅れが生じたことから、公2 事業として予定していたハイライフセミナーの実施は 2025 年度ではなく、翌年度に開催する予定とした

■研究概要

テレワークの浸透に加え、近年の AI の登場により、企業とオフィスワーカーの関係性は希薄化と再編が同時に進む局面に入っている。こうした変革期において、ワーカーがどのように仕事に向き合い、組織との関係性を再構築しているのかに着目し、オフィスワーカーの働き方と意識の変化を捉える研究を行った。

2025 年度の研究を通じて、「Worker's PRIDE」という概念仮説を立案した。Worker's PRIDE とは、ワーカーが仕事を自分ごととして捉え主体的に取り組むと同時に、会社全体にとって望ましいと考えられる行動を自発的に選択したいと感じている心理的状态を指す概念である。本研究では、この概念を新しい時代における生産性や価値創造の基盤となる要素として位置づけた。

Worker's PRIDE 概念図



この概念をもとに、高知県のスタートアップ企業と議論を重ね、同社が予定しているオフィス改装を契機として、従業員がオフィスづくりに参加することで Worker's PRIDE の発現プロセスが促進されるのではないかと仮説を設定した。さらに、オフィスの物理的な設計にとどまらず、日々の活用の仕方を意図的に設計・運用していくことが、Worker's PRIDE の発現および定着を促進する重要な要素であるとの視点を加え、実証実験の設計を行った。

■アウトプット

- Worker's PRIDE 概念および概念図の整理
- オフィス設計と日常的な活用・運用を含めた実証実験計画の設計

■アウトカム

新しい時代の働き方に即した生産性および価値創造の向上に向けた視点の提示。企業経営におけるワーカーの主体性を引き出す環境設計・運用の可能性の示唆。

■その他

当初、公2事業として本取組みの成果発表を2025年度に行うことを想定していたが、オフィス改装の実施時期が当初予定より遅延したため、成果の発信については、実証実験の実施後となる2026年度に行うこととした。

■研究概要

近年、ポジティブ・オフの推進やリモートワーク、ワーケーションの普及により、都市生活者の働き方と余暇の関係は大きく変化している。これに伴い、「働く・遊ぶ・休む」という機能が空間的に分離されてきた従来の都市構造に代わり、これらの機能が近接し、相互に重なり合う新たな都市生活様式が形成されつつある。

本研究は、このような都市生活者の変化を背景に、都市における「水辺空間」の可能性に着目したものである。水辺空間は、自然環境と都市活動が融合する場として、文化的交流性、開放性、環境的快適性を備えており、都市生活者の滞在性や回遊性、活動の多様性を高める潜在力を有している。とりわけ、商業消費を前提とした余暇空間に偏りがちな都市において、日常の中に回復性や創造性、非日常性をもたらす「質の高い滞在空間」としての役割が期待される。

本研究では、水辺空間が都市生活者の日常行動にどのような影響を与え得るのかを明らかにするとともに、「働く・遊ぶ・休む」が緩やかに交差する場としての水辺空間が、日常生活の中に「非日常的体験（プチ・ホリディ的感覚）」を生み出す可能性について検討を行った。行政や都市開発事業者、建築家・都市デザイナー、NPO 等の多様なプレーヤーが関与する共創的な都市づくりに資する視点の整理を目的としている。

■アウトプット

ホームページ企画として、有識者へのインタビュー・レポートを配信

・第1回「『池』という文化」

中島直人氏（東京大学大学院 工学系研究科 都市工学専攻教授）インタビュー

・第2回

「Soft City」デイビッド・シム氏（都市デザイナー／スウェーデン）インタビュー

いずれも研究仮説の裏付けや、今後の水辺空間研究を進めるための研究素材・研究ヒントを得ることを目的として実施し、本研究仮説の有効性が示唆された。

■アウトカム

行政（都市開発）、都市開発事業者、都市デザイナーや建築家、NPO 等のプレーヤーが水辺空間を活用する際に参照できる「コンセプト・シート：これからの水辺開発に求められる要素」を作成し、その活用を促していくための基盤整理

2025 年度にて研究終了

■研究概要

本研究は、障害者の課題を起点として、高齢者やその他の社会的ギャップを抱える人々の状況を広く捉え直し、誰もが生き生きと活動できる社会、すなわちノーマライゼーションのあり方を考察することを目的とした特別研究である。

令和7年度は、公益事業1の特別研究として位置づけ、具体的な施策提案や実装を目指す段階には踏み込まず、研究目的に掲げた課題認識や概念の検証に重点を置いて活動を行った。とりわけ、障害者や高齢者をはじめとする現代社会において何らかのギャップを抱える人々を包摂するためには、個別支援にとどまらず、地域全体で支え合う「地域共生」の考え方が重要であるという視点にもとづき、理論的整理を行った。

本研究では、ノーマライゼーションが制度や仕組みとして一方的に与えられるものではなく、地域の人々（団体・法人・行政など）が主体性やリーダーシップを発揮し、場やコミュニティを創出し、そこに周囲の人々が参加していくプロセスを通じて、地域の中で育まれていくものではないかという仮説を検討した。現段階では、特定の分野やプレーヤーに焦点を定めるには至っておらず、基礎的な概念整理を中心とした研究段階に位置づけられる。

■アウトプット

なし（基礎研究段階のため）

■アウトカム

なし（基礎研究段階のため）

■その他

本特別研究は、基礎研究の段階を終えたため、ひとまず取組みを終了することとした。

(3) 事業内容：(公益事業2)「啓発・活動」

公2 ホームページ企画 A「速報！わくわくお買い物レポート」

2025 年度にて研究終了

■研究の概要

本企画は、生活者の「食の買い物」に表れる感情や意識の変化に着目し、スーパーマーケットの購買データを通じて日常の暮らしを読み解くことを目的としたホームページ企画である。季節の移ろいを感じる、行事や催事を楽しむ、流行に反応する、節目に備える、新しいことに挑戦するなど、人の気持ちは日々の食の買い物にも反映されるという考えのもと、生活者の心の動きを可視化する試みとして実施した。

研究手法として、食品スーパーIDPOS データベース「real shopper SM」をデータソースに用い、購買行動の変化を切り口に、生活者の意識や気分の揺らぎを読み解くコラム形式の情報発信を行った。消費動向を単なる数値分析にとどめず、生活の文脈や感情と結び付けて解釈することで、データから暮らしの変化を感じ取る社会的視点を持った研究を志向した。

■アウトプット

ホームページ企画「速報！わくわくお買い物レポート」を計16本配信

タイトル一覧

今風お花見の楽しみ方/キャベツの値段が戻ってきた/春はキウイが最高/春の新生活を支える冷凍パスタ/いよいよGW！お買い物にも楽しい気分があふれています/冷やし中華始まりました/令和のふりかけがアツい！/そうめん＝軽食の時代は終わった？/丑の日が近づいてきました！/ヨーグルトにアボカド！？/アイスのヘビーユーザーのお好みは？/夏の塩分補給塩タブ女子・塩飴マダム/災害の備えについて/今年の秋は久々にさんまが食卓の主役/秋の主役栗市場に変化あり/値上げの1年、スーパーの買い物はどう変わっていたのか？

■アウトカム

生活者の食の買い物行動を通じた暮らしの捉え直し。日常生活における気づきや、より良い暮らしにつながるヒントの提示。

■その他

一部の閲覧者からは「より良い暮らしのヒントを得た」といった共感の声も得られた。一方、研究としての深掘りや新たな展開には限界が見え始めたこと、また「real shopper SM」データの活用が約6年にわたり一定の区切りを迎えたと判断し、本企画はひとまず終了とした。

■研究概要

本研究は、龍谷大学政策学部教授・服部圭郎氏との共同研究として、2013 年度より 13 年間にわたり継続して実施している事例研究である。これまでに 360 を超える国内外の事例を蓄積しており、その知見は公2 事業として広く社会に向けた啓蒙活動に活用されるとともに、ハイレイフ研究所ホームページへの重要な流入口としても大きな役割を果たしている。

「都市の鍼治療」は、まちづくりにおいて大規模投資や全面的な再開発に依拠するのではなく、「小規模介入／低コスト／局所的ではあるが波及効果の高い」実践に着目したケーススタディを提供する考え方である。このアプローチは、人口減少の進行により税収減少の傾向にある基礎自治体や、限られた資源の中で活動するまちづくり団体にとって、現実的かつ実践可能な示唆を与えるものである。

世界各地の実践例を通じて、「ツボを押さえれば、お金がなくとも都市やコミュニティは活性化できる」という仮説を、具体的かつ体系的に提示してきた点に本研究の特徴がある。

■アウトプット

- ・「都市の鍼治療」データベース No.351～362（計 12 事例）を配信

タイトル一覧

テートモダン（イングランド）／ネバーランド（東京）／西陣ビール（京都）／ファンケルベルクの田園都市（ドイツ）／北鍵谷公園（京都）／ルート 69（埼玉）／インヘーブ公園のクリマパークへの改修事業（デンマーク）／高森駅（熊本）／茶源郷乗合交通 WazCar（京都）／サスティナブルコミュニティ「セーゲパーク」（スウェーデン）／ウスタグロ屋上農園（デンマーク）／ハンガリー民族博物館（ハンガリー）

- ・解説動画

「都市の鍼治療データベースのトリセツ『都市の鍼治療 指南書』の使い方」を配信

鹿島出版会より『都市の鍼治療 指南書』（2025 年 8 月刊）が出版されたことに伴い、本データベースの特徴や優位性を紹介する動画を公開した。

■アウトカム

人口減少や財政制約といった構造的課題を抱える基礎自治体やまちづくり団体が、資源制約下でも実行可能なまちづくりのヒントを得て、主体的な行動を起こしていくための思考の枠組みと実践的示唆の提供。

2025 年度にて研究終了

■研究概要

本企画は、当財団の知的資産である「都市生活者意識調査」について、「15年にわたる社会調査の蓄積」という価値を社会に提示し、調査結果の理解と活用を促進することを目的としたホームページ企画である。

分析にあたっては、単年ごとの結果紹介にとどめず、複数年にまたがる調査データを横断的に捉えることで、都市生活者の価値観が中長期的にどのように変化してきたのかを可視化することを重視した。経済成長や効率性を前提として設計されてきた従来の都市の価値と、成熟社会において生活者が重視する「心の豊かさ」や「自分らしさ」との乖離に着目し、このギャップを読み解くことで、今後の都市生活のあり方を考えるための材料を整理することを狙いとした。

また、年代・時代・ライフイベントといった複数の軸を横断することで、都市生活者の意識変化を単発的ではなく構造的に捉える視点を整理し、自治体や民間企業、研究機関が政策やサービス、都市設計を検討する際の基礎的な知見となることを目指した。

■アウトプット

都市生活者意識調査 2010-2024 の 15 年分のデータを横断的に分析し、都市生活者の価値観変化や人生観の揺らぎ、生活実態と都市の設計思想との間に存在するギャップを可視化したウェブレポートを計 12 回掲載

- ・レポートシリーズ①「今昔物語」（全 5 回）

同一設問の時系列比較を通じて、コロナ前後や社会環境の変化に伴う都市生活者の意識構造の変化を読み解いた

- ・レポートシリーズ②「テーマ研究」（全 3 回）

人生選択に関わるテーマから、都市生活者の価値観の多様化を整理した。

- ・レポートシリーズ③「グラフで見る都市生活者の意識変化」（全 4 回）

生活の節目における意識変化のタイミングを可視化した

■アウトカム

15 年分の都市生活者意識調査データを横断的に可視化することにより、コロナ禍や社会変容を経た都市生活者の価値観の時系列的・構造的な変化を明示。政策・サービス・都市設計の再検討を促す議論に対する基礎的知見の提供。

■その他

2026 年度より都市生活者意識調査の設計変更が予定されていることから、本企画については本シリーズをもって一区切りとし、続編の作成は行わないこととした。

2025 年度～研究継続

■研究概要

本研究は、法政大学デザイン工学部教授・小堀哲夫氏（小堀哲夫研究室）との共同研究

「テリトリー」とは、イタリア語で「都市と周辺の田園や農村とが密接につながり、支え合いながら、共通の経済・文化的アイデンティティを持ち、個性を発揮してきたそのまとまり」を意味する概念である。本研究では、イタリアにおけるこうした地方創生的な取組みを理解したうえで、日本における応用可能性を検討することを目的とし、特に若い人の感じ方や視点を起点として研究を実施してきた。初年度は、幸福度ナンバー1 とされる福井県（日本総合研究所編）に焦点を当て、2 年目にはイタリアでの取材および大都市近郊である流山市を対象に加えて考察を行った。3 年目となる本年度は、さらに異なる視点からの研究アプローチとして、アフリカのケニア共和国での取材を実施し、日本側の比較対象として福井県あわら市を選定した。

少子高齢化の進行によって都市の衰退が懸念される日本において、都市とその周辺地域の関係性を再編し、新たな地域活性化の可能性を見出すことは重要な課題である。本研究では、「テリトリー」という視点から、国内外のケーススタディを比較しながら、日本の地方創生につながるヒントを探索してきた点に特徴がある。また、小堀哲夫氏およびゼミ生による若い世代の視点を取り入れることで、これからの社会課題に対して新たな切り口からの検討を行った。

さらに、本年度に実施したケニアでの調査では、都市と暮らし、建築と人の関係性が異なる文脈の中で形成されてきた空間や生活のあり方に着目し、日本の地域や都市を相対化して捉える視点を得ることができた。こうした知見は、日本各地の地方自治体や地域団体が地域活性化を検討する際の参考となる視点として整理した。

■アウトプット

ホームページ企画「テリトリー3～共存のテリトリーへ～」を計6本配信

タイトル一覧

- ・第1回 3年目のテリトリー研究/ケニアPJ調査報告書①
- ・第2回 6日間の調査概要/ケニアPJ調査報告書②
- ・第3回 黒綿土ブロックWS
- ・第4回 福井PJ調査報告WS参加とインタビュー
- ・第5回 「テリトリーの2つの姿を振り返る」
- ・第6回 「テリトリー研究を通して感じる、異邦人の視点と建築の本質」

■アウトカム

国内外におけるテリトリーの事例や経験を体系的に整理することによる、日本における地域活性化の多様なあり方を検討するための視点の提示。小堀哲夫氏およびゼミ生による若い視点からの気づきによる、地方自治体や各種NPO・団体等のプレーヤーに資する基礎的な示唆の提供。

2025 年度にて研究終了

■研究概要

本事業は、2020 年度に刊行した調査研究報告書籍『銀座の時層 ～ハイライフ的銀座の歩き方～』の成果を踏まえ、新たに未来的なパースペクティブを加え、「銀座の時層 2030」として書籍化・販売を行うことを前提としたもの。書籍の販売までを当初から視野に入れた事業計画は、当財団として初めての取り組み。

『銀座の時層』は、当財団の所在地という地の利を活かし、世界的に知られる銀座という街の魅力を、街の変遷の記憶を内包した「場（ランドマーク）」を手がかりに、積み重なる「時間」と、そこを訪れる「人」を掛け合わせて分析する試みとして制作された。刊行後には、銀座という都市を多層的に捉える視点に対して一定の反響を得ることができた。

こうした反応を背景として、既存の調査研究成果を基盤に、将来視点を加えてより広く社会に発信する可能性について検討を行った。

■アウトプット

書籍「銀座の時層 2030」（出版構想）

■アウトカム

銀座のイメージアップ

■その他

「銀座の時層 2030」については、有識者ヒアリングや内部での議論を重ねた結果、書籍としての出版を見送ることとした。また出版を前提とした事業計画のためコンテンツの更新も行わないこととした。

出版には至らなかったものの、検討過程を通じて、調査研究成果を社会に発信する際に都市ブランドを扱う広報・出版事業における留意点や判断軸に関する知見を蓄積することができた。

3. ＜運営体制の充実を図るための取組み＞

(1)資産運用における取組み

- ・当財団は「安定的かつ健全に財務運営を行う上で必要な総合収益を確保すること」という資産管理・運用の目的を達成するために、資産運用ルール規程を制定している。
- ・また、資産管理・運用にかかる基本方針を実現するために、外部有識者を中心とした資産運用委員会を設置している。

(2)研究事業における取組み

- ・当財団は、＜公益事業1＞調査・研究事業と＜公益事業2＞啓発・活動事業の実施・運営に関し、各研究事業を評価する「事業ミーティング」（次頁＜参考＞ご参照）を実施している。（全所員参加）これにより、各研究事業の質的向上を図ることは勿論、研究予算の適正運用や今後の研究継続の必要性等を確認している。
- この事業ミーティングは、進行中の研究事業の評価だけでなく、新年度の研究案件の選定時にも実施し、当財団にふさわしい研究事業か否かを全員で検討するためのものとしても活用している。

(3)法人運営における取組み

- ・適切な法人運営を行うため、理事会のほか、常勤理事会および全役職員が参加する全体会議を毎月各1回開催している。
- ・公益法人会計の専門家である公認会計士の外部監事による監査を受けており、業務財務状況および執行状況について透明性と信頼性を高めている。
- ・公益法人会計に高い知識を有する税理士法人に税務を委託している。
- ・公益法人協会が主催する制度運営や会計に関する各種セミナーについて定期的に受講し、各種制度に準拠した法人運営に努めている。

＜参考＞事業ミーティングにおける各事業についてのまとめと令和8年度への実施について

事業・研究項目	内容・要点	令和8年度の実施について
都市生活者意識調査	これまで実施してきた調査データについて当財団内外での活用方法について議論した。あわせて令和8年度から再開する調査についての方向性について議論した	新しい調査設計のもと事業継続
【都市×知】共創研究	「ガストロノミーアーバニズム」研究について食を都市の空間・社会・経済・文化を横断的に接続する「媒介」としてとらえる独自視点について議論した	「ガストロノミーアーバニズム」においては一定の結論を得たものとして事業終了
リアル×バーチャ研究	沖縄での研究を起点に地域活性化に取り組む地方でのヨコ展開や収益機会創出事業発展の可能性について議論した	事業継続
Worker's PRIDE 研究	「Worker's PRIDE」概念についての共有とともに社会実装に向けた取り組みについて議論した	事業継続
テリトリーオ研究	都を単体でとらず周辺田園や農村とが密接につながりに着目した研究視点について議論を行った	事業継続
水辺都市の研究	あらたな水辺都市開発につながる独自コンセプトについて、さらにそのコンセプトの活用について議論した	事業継続
ノーマライゼーション研究	誰もが生き生きと活動できる社会の実現ために障害者や高齢者などの現代社会にギャップを抱える人なども包摂していくことの重要性について議論した。	事業終了
速報！わくわくお買い物レポート	従来からと同じデータベースを活用しているレポートのため、データの活用の仕方やレポートの表現について議論を行った	real shopperSMについては一定期間活用してきたこともありひとつの節目とらえ事業終了
「都市の鍼治療」	当財団HPへの流入にもっとも貢献の高いこのコンテンツのポテンシャルについて議論した	更なる活用の可能性を感じ令和8年度は事業を拡大し継続
「銀座の時層2030」出版化	出版化に向けた方法論について議論した	早期の出版は見込めないと判断し事業終了

以上